

杉並区立下井草図書館

名作文庫通信



2024年 夏号



夏季特集

芥川龍之介をめぐって

文学の師である夏目漱石、友人の菊池寛、久米正雄、谷崎潤一郎、室生犀星、斎藤茂吉など、芥川龍之介にゆかりのあった作家達の作品を集めました。



【芥川龍之介書簡集】

芥川龍之介/著 石割透/編 岩波文庫/刊

東京帝国大学英文科在学中に書いた小説が夏目漱石に認められ文壇に登場した芥川。時代の寵児として、遺憾なく才能をふるったかのようにみえる芥川だが、身近な友人や女性に宛てた手紙の中には、繊細で、傷つきやすい、純粋な青年の姿がみられる。親友へ、失恋の痛みと、絶望を書き送った手紙もあれば、妻となる塚本文に結婚を申し込んだ手紙もある。文学作品では味わえない、芥川の間味あふれる一面を感じることができる。

【室生犀星詩集】

福永武彦/編 新潮文庫/刊

「故郷は遠きにありて思うもの」の詩句で知られる室生犀星は、日夏耿之介の処女詩集の出版記念会で芥川龍之介と出会う。犀星の処女詩集『愛の詩集』に感激した芥川は、読後の感動を詩にして、犀星に送っている。二人とも田端に住み、近所同士で、足繫く訪問しあっていた。関東大震災後、犀星は、一時期、金沢に帰郷するが、芥川が旅行で金沢へいったとき、犀星が、兼六園などを案内している。

室生犀星詩集

福永武彦編



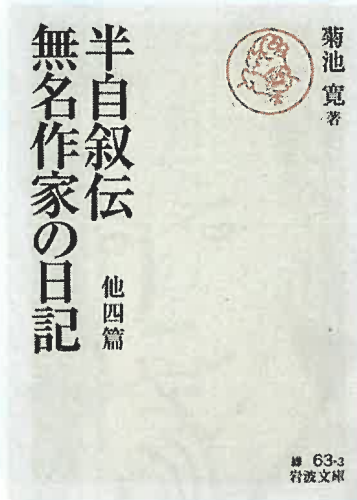
新潮文庫

「名作文庫」とは？

下井草図書館では文学、哲学、思想、歴史などの名著名作を文庫版・新書版で集め、「名作文庫」としてご紹介しています。



今月の1冊 心の旅を描く物語



【半自叙伝・無名作家の日記】

菊池寛/著 岩波文庫/刊

大正から、昭和初期にかけての文壇の大御所、菊池寛。文藝春秋社を創設し、後に、映画会社の社長もつとめた。芥川とは一高の同級生だった。芥川の長男比呂志は菊池寛の「寛」からとっている。小島政二郎の『長編小説 芥川龍之介』によれば、芥川が晩年、心身ともに衰弱していたとき、菊池は、生活費は文藝春秋社でもつので、一年ほど休養するように勧めていたそうだ。

新着本 新しく入った本のご紹介



【若きウェルテルの悩み】

ゲーテ/著 酒寄進一/訳 光文社古典新訳文庫/刊

ウェルテルが恋をしたのは、婚約者のいるロッテ。彼女と同じ時間を共有するなかで愛情とともに深まる絶望。自然への憧憬と社会への怒りのあいだで、翻弄されるウェルテルの繊細な心の行き着く先は…。文豪ゲーテの出世作。(TRC MARKより)



【グリーン家殺人事件】

S.S.ヴァン・ダイン/著 日暮雅通/訳 東京創元社/刊

名門グリーン一族が暮らすグリーン屋敷。ある雪の夜、一族の長女が射殺され、三女が銃創を負った状態で発見された。事件はさらに続き…。探偵ファイロ・ヴァンスが難事件に挑む。ミステリ史に燦然と輝く不朽の名作を新訳。(TRC MARKより)

編集後記

「人生はひと箱のマッチに似ている。重大に扱うのは莫迦莫迦しい。重大に扱わなければ危険である」。芥川のアフォリズムだ。これに、ずっと、ひっかかっていた。マッチって危険だろうか？ 全集の年表を調べていてわかった。芥川は、マ擦ったマッチの火が左目に入り、病院で治療したことがあるのだ。やっと腑に落ちた。マッチの扱いには注意が必要だ。

発行：杉並区立下井草図書館
杉並区下井草3-26-5

